

# POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」  
第 49 号 2001.10.15

発行  
北海道ポーランド文化協会  
〒 060-0052  
札幌市中央区南 2 東 2  
河合楽器製作所北海道支社  
電話 011-231-8661  
FAX 011-221-4936

## 知られざる

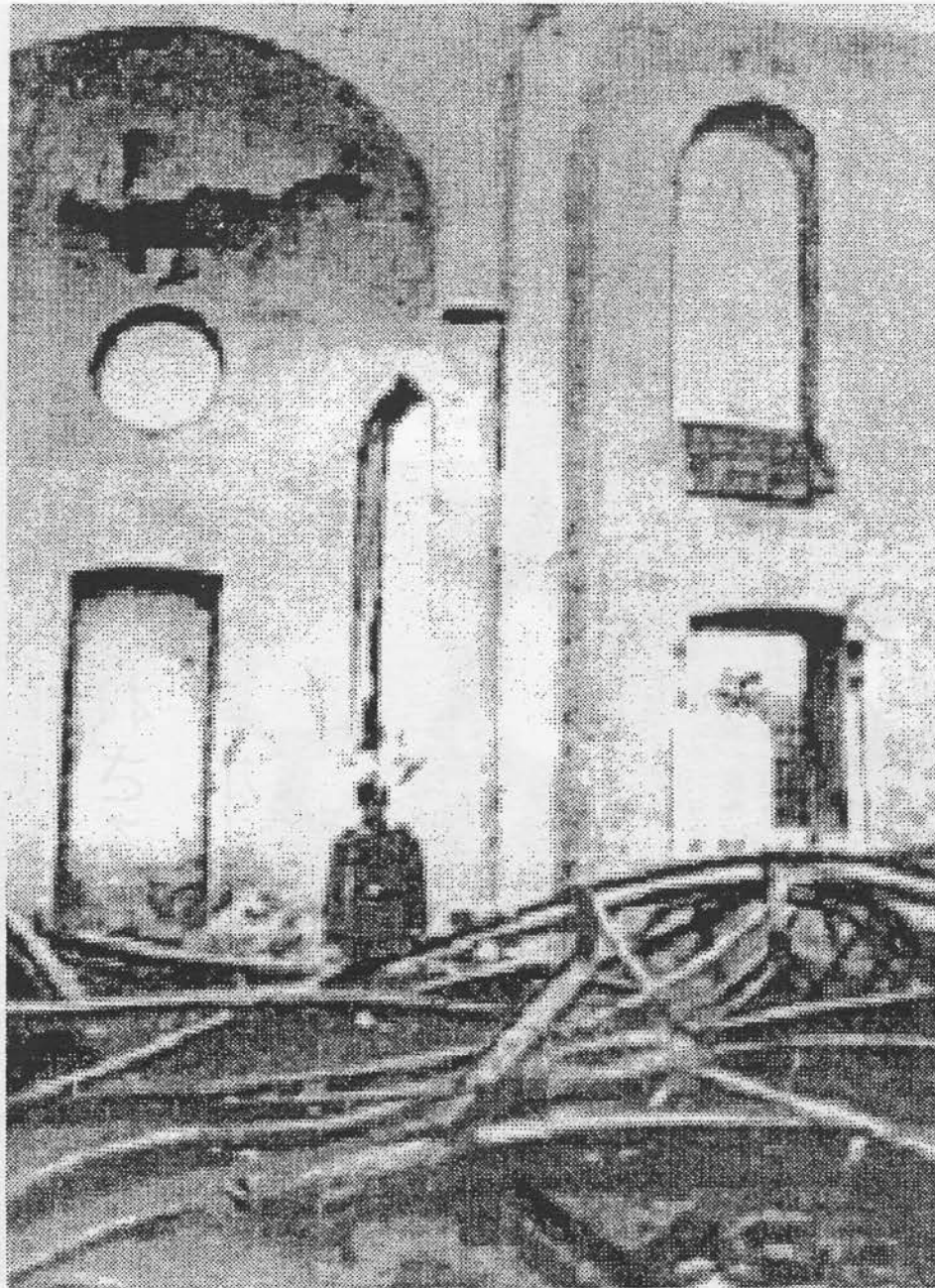
## ポーランド (2)

小原 雅俊

ハシバミの実を食べたことがあるだろうか。木漏れ日がまぶしいコンもりと茂った大きな葉の間から釣鐘のような実をもちで、まわりを包むピロードのような外側の皮を剥き、こりこりした青い果実を初めて口にしたのは、ワルシャワ大学の学友の家族が住むポーランド最北端の、冬には零下三十度を超えることがある人口六万人弱の町スヴァウキを訪ねたときだった。北に向かうとすぐロシアの飛び地に遮られ、東に向かうとリトアニアとの国境にぶつかると、無数の湖や沼地とそれを取り囲む深い森はさらに東へと伸びている。アンジェイ・ヴァイダの映画『愛の記録』の物語もそんな深い森

に囲まれたニエメン川（リトアニア語でネムナス、ベラルーシ語でネマン）の右岸支流ヴィリア川沿いのポーランドの町ヴィルノ、今日のリトアニアの首都ヴィルニウスが舞台だ。その北西にはニエメン川に面して杉原千畝氏がユダヤ人を救出したカウナス（ポーランド語名コヴノ）がある。スヴァウキもまたニエメン川の左岸支流チャルナ・ハンチャ川に面している。この川はまもなくして最深部が七十三メートルに達するヴィグレイ湖に流れ込む。そこが複雑な地形、豊かな動植物相を誇り、無数の湖沼と水路で結ばれたカヤック愛好者の天国、ヴィグレイ国立公園だが、この一帯もまた鬱蒼とした

森に囲まれ、そこに川や大きな湖があることが分らないほどだ。私にとってポーランドのユダヤ人世界のイメージはこうした豊かな水を湛えた川とその周りに広がる深い森の中に開けた小都市と結びついている。もちろん大都市にも多くのユダヤ人が住んでいた。例えばヴィルニウスの一八九七年の民族構成をみるとユダヤ人が四〇・三%を占めていた（他にポーランド人三〇・九%、ロシア人二〇・二%、ベラルーシ人四・二%、リトアニア人はわずか二・〇%、その他二・四%）し、カウナスでは一九三三年には全住民の三分の一がユダヤ人であった。しかし、かつて栄華を誇り、黒海にまで版図を広げた第一共和国時代のポーランド領ではユダヤ人は大都市だけでなく、シウラフタとともに地方へと移動し、いたるところに極めてポーランド的な現象とされるシュテットル（彼らが話していた言語のイディッシュ語で「小さな町」の意味）を築き、そこで敬虔な宗教共同体を営んだ。西欧ではユダヤ人の住みついた国とその文化への同化が進んだが、ポーランド、とりわけかつてのロシア分割占領下では、第二次世界大戦にいたるまでこのようなユダヤ人共同体がいたるところに残っ



1941年ナチスが1000人のユダヤ人とともに焼き払ったビャウイストクの大シナゴグの焼け跡 (1941年撮影)

ていた。スヴァウキにも大きなユダヤ人集住地があった。イエドヴァブネにどれだけのユダヤ人が住んでいたか確定するのは難しいが、ポーランド人住民による虐殺が起こったときの町の人口と犠牲者数一六〇〇人

(この数を確定するために死体発掘までしたが、ユダヤ教の宗教上の制約から全面的には行えなかったようだ)を比較すると、かなりのパーセントテージになると思われる。そこを東に向かうと、無数の民族、言語、

宗教、習俗が隣り合って暮らしていたがゆえにエスペラント語を構想したとされるザメンホフの生地、ポーランド北東部最大の都市ビャウイストクがある。両大戦間期にはウオムジャ、スヴァウキ、グロドノをもそ

の一部としていたこのビャウイストク地方では一九一九年には住民の一七・四%がユダヤ人であり、時にユダヤ人が住民の半分以上を占めて、「ヨーロッパ・ユダヤ人の心臓」とも呼ばれた地域だった。ビャウイストクの町自体も一九一三年のピーク時には人口の七〇パーセントがユダヤ人であった。一九三九年には、この町に敬虔なユダヤ教徒の祈りの場であり、学問や会合の場でもあったシナゴグや祈りの家が一〇〇近くあった。

イエドヴァブネの「犯罪」がどのようなものであったか、なぜ起こったのか、今のポーランド人がそれをどう受け止めようとしているかを理解するには、今では記憶の中にのみ生きる、かつてヨーロッパの他の部分から追放されてポーランドに避難所を見出し、ヨーロッパ最大のユダヤ人集住地となり、貧しさに喘ぎながらも他のどの国にも見られなかった豊かな文化を生み出しながら、ポーランド人と運命をともにしてきたポーランド・ユダヤ人の歴史を抜きにしては不可能であろう。

(こはら・まさとし)

東京外国語大学外国学部



## 懐かしのポーランド旅行

渡辺 洋子

ポーランドから無事に帰ってきて、まだ時差ボケでポーっとしている時に、ニューヨークの事件がテレビから飛び込んできて身の毛も立つような恐怖を感じています。あらためて無事に帰ってきたことを神に感謝しなければいけません。

四年前に初めてポーランドに行つて今度は二度目のポーランドです。町は明るく美しくなり活気があふれていると思えました。車の色もきれいに多くなってお店が増したし本も数多く出ていますし、写真集もきれいになり値段も倍くらい高くなっています。やはり工事中の所が多いのは相変わらずで、でも日本の道路工事とは違い、古い昔の復興の為の工事で、幾度となく侵略されながら、町や建物が破壊されながらも、写真や古い記録をたよりにもとに又復元させるポーランド人のたくまし

い根性と昔の文化を愛し、誇りに思う気持ちはすばらしいと思います。

### ワジエンキ公園の緑

最初に訪れたワジエンキ公園、まだ緑が多い広くゆったりした公園ですが、私は黄金色に輝いていた前回のワジエンキ公園が好きです。前に来たときは一〇月上旬、一カ月の違いですが落ち葉が敷き詰められ、黄金色一色の公園に歓声をあげてしまったその印象が強くあったのでつい比較してしまいました。でも緑多いたくさんの花が咲き、小鳥達も数多く集まった公園もすてきです。シヨパンが抱いていたのはハーブではなく柳の木がなびいていたのも今回わかりました。

旧市街の中央市場もアイスクリームの店や喫茶店もでき、大道芸人も多く、人々も多く活気あふれてい

る、元気になつていると感じました。

### 胸がつまった

#### アウシュビッツ

今度一番心に残っている所はアウシュビッツです。悲しくて胸がつまる思いでいっぱいです。ガイドの中谷さんの心に問

いかけるような説明は胸にささつてくる悲しさで深く考えさせられました。長い道のりを歩いてきたたであるうポロポロの靴の山。一目で自分の物とわかるように名前を大きく書いてある皮かばん。そして何よりも悲しかったのが死者の頭から刈り取った髪の毛の山。長いおさげの髪もたくさんあって、その横にはその髪で編んだ布を見たときは涙があふれてしまいました。ガス室、死者を焼いた釜、大きな煙突、どんな思いで殺し、殺されていったのでしょうか。いくつかの写真には今死んでいくのになぜあんな笑顔ができるのだろうか。その瞬間は幸せだったのだろうか。その笑顔が悲しいです。ドイツ人はヒットラーはなぜユダヤ人を憎み殺したのだろうか。命令とはいえなぜこんな事ができるのだろうか。それが戦争なのでしょうか。

ドイツの若い学生たちがこのアウシュビッツを見学している姿を見て、何かホッとするものがありました。半世紀も前に自分たちの国がやったことをどんな気持ちで受けとめているのだろうか。言葉がわかれば問いかけてみたかったです。私たちが日本も戦争中に行つた事実も明らかに、やった事もやられた事も今の若い人たちに知らせるべきではないだろうか。彼らはその事実をしつかりと受けとめ、考えてもらいたい。そして戦争の悲惨さをわかってもらいたいと思うのですが。

### クラコフの花嫁さん

雨のクラコフもあの美しい姿のままの町でした。ヴィスワ河畔の丘にそびえ立つバベル城、そしてにぎやかな中央市場広場、ゆっくり時間があつたのでたくさん散策できました。結婚式も二組もあつて、馬車にのつた花嫁さんは可愛かった。兵隊さんの整列、教会の塔の窓から吹かれるラッパの音、途中でやめるのはその時、矢で打たれ死んだからだそうです、皆に手を振つての愛嬌は大笑いでした。

### ザコパネの山賊小屋

初めてのザコパネは楽しい町で



す。市場がたくさん出ていて、日本のお祭りのようです。チーズや羊毛がびっくりするほど安く、野菜、果物もおいしくめずらしい物ばかり、ついたくさん買い物をして、どうして日本に持って帰ろうか悩んでしまいました。

夜の山賊小屋は派手にドラを鳴らして歓迎して、ドラが鳴る度にドキンとするほど驚いたけど、慣れると楽しい物でした。料理を運ぶ娘さんもからのお盆をわざと床に落とし、ドラに負けない音も楽しくなり、元気が出てきます。民族衣装も可愛く踊りや歌もすばらしかったけれど、みんなで踊ったダンスは飛んだりはねたり廻ったり、疲れても休ませてくれない、へとへとになりながらも踊ってしまうゆかいなゆかいなダンスは忘れられない思い出になりました。

#### 城壁に囲まれたトルン

トルンも落ちついた静かな街です。城壁に囲まれた街は昔の古い建物がびっしり並んでいてポーランドの歴史が感じられます。コペルニクスの生まれた街でもあります。

今回も私の期待を裏切らなかった

▲ザコパネの「山賊小屋」での演奏

のは料理です。一番先に出てくるスープのおいしいこと、前回と同じようにひとつとして同じスープはありませんでした。先にスープを全部たいらげてしまうので次の肉料理、魚料理がおいしいのに半分も食べられない。くいしん坊の私はそれが残念でたまりません。日本人には量が少し多いのかもしれない。パンも味があつて大好き、ソーセージ、ハム、チーズもポーランド特有のどろけるうまさに幸せいっぱいでした。

汽車での移動が多かったのも楽しかったです。ポーランド人と近く接する機会があつて嬉しかった。言葉なしでもコミュニケーションで心は通じるものですね。でもやっぱりポーランド語で話してみたいですね。二度目のポーランドは少し心に余裕を持たせてくれたように思います。参加した皆様は皆ご夫妻で私だけ一人参加でしたが、皆様やさしく思いやりあるすばらしいご夫妻ばかり、うらやましい思いでした。皆様に親切にして頂き、さびしい思いもせず、わがままいっばい楽しいポーランドの旅をさせていただき感謝しております。ありがとうございます。

(北海道ポーランド文化協会会員、秋田市在住)

# クラクフ留学記

佐光伸一

一九九八年十月から二〇〇〇年六月までポーランド政府給付奨学生として、クラクフのヤギェウオ大学の文学研究科に留学した。ポーランドといえば、中世の時代から優れた文学の伝統があり、ラテン文化の深い影響のある地域なので、「本物の文学研究ができるのではないか」と

希望に胸を膨らませて出発した。一年目は学部の授業について行くようになるためポーランド語学校 Instytut Polonijny で学び、二年目からようやく大学の学科の方へと通い始めた。そもそも国文学といえば母国人は大学入学時に既に相当の知識を持っており、さらにヤギェウオ大学

## 11月30日に総会

例年は10月に開かれていた総会が、今回は11月30日(金)午後6時30分より、かでの2・7(中央区北2西7)550会議室で開催されます。11月に延期されたのは、9月に行われた運営委員会で、繰越金の減少が報告され従来の活動と協会のあり方を見直さざるを得なくなったからです。

そこで、運営委員会内に作業部会が設けられ、協会の規約を見直す作業が現在進められています。総会では、決算報告とともに規約改正案がはかられます。

- 午後6時30分より総会
- 午後7時より懇親会(ポーランド旅行報告会を兼ねる)
- 会費2千円(軽食・ドリンク付)
- ご出席は同封のハガキでお知らせ下さい。ご欠席なされる場合は必ず委任状をご記入の上ご投函下さいますようお願いいたします。

なお、従来のサロンコンサート形式の懇親会は、新年度の例会として開催を検討しています。



のポーランド学科はポーランドの中でもきわめて優秀で、現ローマ法王のヨハネ・パウロ二世、ノーベル文学賞受賞のヴィスワヴァ・シンボルスカなどそうそうたる知性を輩出している。そんなところの授業に、ポーランド語を一年間学んだぐらいの学力でついていけるわけがない。ちょうど東大文科の「万葉集」のゼミに小学生が紛れ込んだような感じといえば、分かっていただけだろうか。ポーランド語で学ぶ「ラテン語」、現代ポーランド語もよく分からないのに習う「中世ポーランド語」など、不思議な体験をずいぶんさせていただいた。しかし「中世ポーランド語」の授業では、日本で

学んだ教会スラブ語の断片的知識のおかげで、何度も窮地を救われた。教会スラブ語は日本で学んだ三年間は毎年劣等生だったが、人生どこで何が役に立つか分かったものではない。ちなみに教会スラブ語劣等生は決して私だけではなく、先に名を挙げたヨハネ・パウロ二世ことカロール・ヴォイテイワ氏も大学時代、教会スラブ語の成績が及第すれすれの「可」だったとの伝説が残されている。現在七カ国語を自由に操る語学の天才にもこんな穴があったかと勇気づけられた。

ポーランド人にとって、ポーランド文学を学ぶために遥か彼方の「桜の花咲く国」(ポーランド語では日本のことをこう呼ぶ)から日本人がやって来たという事実そのものが感動的であったようで、どこでも親切にしてもらった。持ち出し禁止の本をこっそり貸し出してくれた図書館の司書のお兄さんの顔などがなつかしく思い出される。

このように「本物の文学研究」ができたかどうかは定かではないが、必修単位が半分以上残っていることは定かなので、近い将来にもう一度クラクフに戻りたいと思っている。

(さみつ・しんいち北海道大学文学研究科博士後期課程三年)

# Halina Czerny Stefanska

## ハリーナ・ツェルニー＝ステファンスカ追悼演奏会



エリザベータ・ステファンスカ



遠藤 郁子



岡田 照幸



吉川 元子



遠藤 道子

2001.  
**11/12** *mon.*

開場6:00PM 開演6:30PM

場所

札幌コンサートホール Kitara 小ホール

〒064-8649 札幌市中央区中島公園1番15号

料金 ※全席指定

一般¥4,000 [税込]、YFC会員¥3,500 [税込]

### ステファンスカ

### 追悼演奏会

去る七月一日に逝去したポーランドの名ピアニスト、ハリーナ・ツェルニー＝ステファンスカを追悼する演奏会が、十一月十二日（月）、キタラ小ホールで開催されます。

当初はステファンスカ・リサイタルが予定されていましたが、追悼演奏会に変更されたもので、北海道ポーランド文化協会も後援します。

出演者は、故人の令嬢でチェンバロ奏者のエリザベータ・ステファンスカをはじめ、遠藤郁子、吉川元子、岡田照幸、遠藤道子の各氏が予定されています。チケットは主なプレイガイドで扱っています。

「ポレ」編集委員会

小笠原正明・斎田道子

佐々木保子・小林美保

三浦 洋

〔連絡先〕 621・1738

(斎田)

POLE 第 49 号(2001.10.15) 目次

小原雅俊「知られざるポーランド(2)」	1
渡辺洋子「懐かしのポーランド旅行」	3
佐光伸一「クラクフ留学記」、第 15 回総会(2001.11.30)のお知らせ	5
ステファンスカ追悼演奏会(2001.11.12)のお知らせ	6